

大正十三年

大正十三年一月一日

新春を向へ新しき希望を起して進まん事を願ふ。新年の会食を午中催し、笹部、山口氏も加はり、矢田食事部の苦心の御馳走に鼓腹する。午後より夜にかけ笑ひ声とトラをフク声とカルタの掛声、さてはマンドリンの響、こゝかしこの室より洩れて断ゆる事なし。

一月二日 昨夜中村君帰省さる。初賣に鉛筆三本をくちで当てゝくる人もあり。

一月三日 三日目の味噌汁なり、久しぶりで美味しいこと。今日、奥田君夕張へ、笹田君はホームへ行かる。スキーに行くは多勢、玉川の両君、残は家でピンポンの猛練習、夜はカルタをするものあり、活動写真を見に行くものあり。

一月五日 夜、白根平野矢口三君の誕生日の祝のコンパを四号室に於て行ふ。快談、縦横愉快の時を過した。

一月七日 冬期休暇も愈々終になった。奥田君夕張より帰りコンパをする。怪談会となり川島君悲観の傾向あり。(朝、大通小学校で種痘をする為に出かけたもの七人程ありたり)

放屁番附をつくる同人ありて奇妙な成績が発表さる。時田 2 7 江尻 2 7 平野 2 6 多勢 2 5 白根 2 4 今井 2 0 土井 2 1 玉川 2 4 其の他の豪の者各幕の中に入る。

幕下には奥田、矢田君点数 1 5 に満たざる人々なり。但し三十点満足秋季音響数量各十点満足の總和なりしとかや。

一月八日 第三学期始まる。寒気甚しく吹雪なり、午后中村君、帰舎せらる。

一月九日 朝 時田平戸両君帰舎す。復興中の震災地よりの消息をもたらず。午后笹田君帰舎す。夜、中村君のお土産のコンパあり。

一月十日 吹雪盛なり。寒気強く北海道をしみ※※と味ふに好い時候なり。

一月十二日 天然痘増々北海道に猖獗するとの事、注意すべき事件なり。

一月十三日 瘴猛なる寒気次第に襲来する傾向あり、しかし皆の元気は衰へず。

一月十四日 実科本科の種痘あり

一月十六日 昨夜来大降雪あり、起きあぐれば新鮮なる銀白の雪は總ての線を柔なカーブをもって覆つてゐた。

全て愉快になって登校する晝までは未だふりやまず、松の枝のかゝるは白熊の仔の群のたはむれの様に見える。それは軒よりさがるあざらしの牙の様なつらゝと対照して奇妙な形をしてゐる。汽車終にすればラッセルが大瀑を逆にした様に雪をかぶつて飛ぶ。午後スキーに行くもの多し。夜、秋田寄宿にピンポン練習をしにゆくものあり。又、今晚より十日間取組ピンポンに東西試合ある事になった。東勝 3 西勝 5。

一月十八日 現今舎生左の如し。

特別室奥田君、一号波木居君、二号玉川君、江尻君、三号矢田君、平野君、四号矢口君、梅津君、五号飯島君、川島君、六号中村君、七号今井君、八号赤羽君、土井君、九号時田君、平戸君、十号平岡君、笹田君、十一号多勢君、白根君、十二号松本君

一月廿五日 本日をもってピンポン春場所十日間が打ち切りとなった。成績左の如し。

東	西
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
●●●●●○●●●●波木居	○●○○○○○●●○平岡
●○●●●●○○○●中村	●○○○○○●○○○白根
○●○○○○●○○○玉川	や○●○●●●○●●●松本
や●●○●●○●○●●飯島	●●○●●○●●○●赤羽
○●●●○●●●●○江尻	●●●●●●●●●●平戸
○○○●●○○●○●川島	○○●●○○●○○○笹田
●○●●●●○●●●平野	●●●○○●●○●○今井
○○○○○●○○○●矢口	●○○○●○○○○○時田
○○○○○○○○○○梅津	○○○●○○●○●●多勢
●●○○○●○●○○矢田	○●●●●●●●●●土井

即ち、東側 51 西 48 をもって東側優勝す。

廿六日 東宮殿下御成婚の日なり、午前式が行はる。宮部先生總長に代って司会す。式はオーケストラの合奏より始り、陛下殿下の萬歳三唱をもって終る。

舎に於ても晝飯にサイダーの乾盃を行ひ祝意を表す。夜、月次会あり、北村、亀井、笹部の三氏列席さる。静かな会合であった。舎生の演説終り、笹部氏学生気風の衰微を嘆げかれ、亀井氏はいつもの如く、河村氏は農村の振興について語られた。

会終り盛大なるへボ抜けありて乱闘しば※※行はる。雑誌の牧笛は冬に適せざる故三学期丈改名する事とし投票の結果

櫓ノ音が最高七点なりき、飯島君呈出、樹氷、白○、静雪、雪原、雪窓、之に○ぐ。

廿八日 決算あり、一日五七銭位

二月六日 帝麻とのピンポン戦をなす。各十名の撰手を出し、我軍優勢なりしかと敵将池田奮戦し遂に大将奥田君との決勝となり一騎打に我軍将惜しくも敗る。

二月十日 手稲登山を決行す。スキーで舎として登りたるはけだし始なり、快晴頂上を極め樹氷を賞し大成功のうちに帰る。

二月十一日 ピンポン大会あり。紅軍大勝す。個人試合あり。一等多勢君、二等山田君、三等梅津君、四等富永君、五等今井君
汁粉のご馳走あり、賞品授与さる。

二月十七日 有志藻岩登山を決行す、吹雪なり。

案ずる程の事もなく帰舎したる六名。

三月二日 卒業生諸兄の送別会あり。今井君、松本君、中村君の三名にて、中村君は殊に六年間在舎され、松本君は中途休学一年にして足掛四年、今井君は三年、皆の特色は中村君は開化したる紳士として我々を啓蒙され、松本君は眞劍の人、圭角あり、農民の心よりの同情者なり、今井君は茸の研究に餘念なかりし人、その熱心は敬ふに足るものあ

り。かの花嫁を送る如く喜び悲しみて送別す。

御馳走は多勢君白根君時田君笹田君の四委員なり。定評ある手腕はこの素晴しき献立をつくり上げぬ。宮部先生、河村氏亀井氏前川氏その他計六名の来賓ありたり。

会食終りて記念撮影をなす。会は七時より盛に行はれたり。

三月十二日 学年試験はぢまる。頑張るものは夜十二時に寝付三時に起く。舎は空気忽ち一変し廊下をすれちがふもの皆無言静かなる事林の如し。

三月十六日 可憐なる黒〇年、倒れて遂に立たず、明月晝の如き雪中の小舎の暗き一隅に死骸を横ふ。惨なり。皆憐れむ。白根君帰省され見送りをなしたり。

三月十八日 月次会兼離別会行はる。宮部先生の御都合にて副舎長改選を先づ行ふ。

当選 波木居君 十三票 次点 矢田君 四票

次点 時田君 三票 即ち、波木居君来学期より副舎長とならるゝ事に定る。

次に有志演説あり、中村、松本、今井三君の卒業と梅津の退舎を送る辞あり。奥田君に時計を贈呈す。前川先生のお話あり、会を閉づ。

委員の改選あり。土井君文藝部、笹田君会計部、平君食事部、平岡君衛生部、多勢君運動部、へボ抜け猛烈なり。

三月廿日 昨日朝平岡君、玉川君、平野君帰省し今朝多勢君合宿経由して故郷に向はる。土井君に文藝部事務を引渡す。中村君より左の図書の寄贈あり。

音楽講話、海洋学講話、T株の田園生活、モントクリスト、聖フランシスの小さい花、他

三月廿一日 不肖土井久作今回梅津兄の後を継いでペンをとる事となった。午前五時江尻君、午後九時時田君共に帰省さる。梅津君より左の書籍を寄贈されたり。「一石この信仰」「ニーベルンゲン」「カアペンター詩集」「カーライル論説集」

(22-23日、25-27日、舎生の帰省)

廿四日 文藝部委員土井久作殿より休暇中委任せられ、不肖道愛が筆を取ることとなった。

二十八日 夜九時八分、梅津君、松本君帰省す。舎に居残る人五人、沈痛味次第につのる。少人数乍らも一テーブルを圍繞して団欒裏に食事するのは落着いて又格別である。

四月一日 三月も何事も無く終った。三月中の主なる出来事、それは只試験の目まぐるしさと世の中に眞の世の浪に、投げ出された数人の先輩との別離とであった。色々の方面で舎の為に惜まれた。梅津君も海を越えて舎を去った。

二日 朝玉川君先頭第一に帰舎せらる。友人の訪問かと思ったら玉川君だ。

三日 今井さん急に帰省さる。料理学の泰斗の舎を去ったので一入萎れる。

八日 朝四時半起床、矢田君と鯨取りを見に行く。二回汽車に乗り遅れ、青菜に塩の感があつた。帰舎れば波木居さんの姿が見えた。夜御馳走にあづかる。

九日 急に玉山君退舎せらる。何だか此の頃は悲喜交々到るの感がある。

十二日 朝、時田君悠然として角帽の初姿を玄関先に現す。ヤア※※の聲幾つもの口より起る。

十四日 山田任君庭球ボール一打寄贈せらる。

廿一日 朝、土井君帰舎す。文藝部主任帰舎されたので幾分か肩の重みが軽くなった様な気がする。

昨日は近頃稀な春日和であった。矢田さん赤羽君と三人で舎の裏の畑を耕し、額に汗する労働の愉快さを味ふ。又、円山辺に春の……を味ひに出かけて行った舎生も一少隊許りあった。今日までに今回、新たに入舎せられた者数名あり。芳名左の如し。

入舎日	科級	本籍地	室号	氏名
十四日	農実一年	神奈川	七号	野崎健之助君
十六日	予醫一年	徳島	十二号	笹部三郎君
十八日	工専一年	香川	一号	濱本喜一君
全	予醫一年	愛知	十二号	杉本良次君
全	予農一年	神奈川	七号	伊勢田實君
全	予農一年	兵庫	四号	福富邦夫君

廿二日 早朝川島君帰舎す。舎は溢るゝばかり賑かである。夜、御馳走にありつく。本日より土井が本誌を書く事となった。休暇中、誠実に日誌を書いてくれた矢口君に対し感謝す。

廿九日 午後七時より決算を行ふ。一日食費五十九銭なり。

五月四日 午前八時より一勢に部屋の変更を行ふ。

在舎三年間よく舎の為に盡されたる楽道家今井孝君退舎さる。

六日 夜、農学実科一年松隈君入舎す。これにて今年は九人の新入舎生を迎へた事になる。

恐らく未曾有の大繁生であらふ。それにしても、飯島君の帰舎のおそい事よ。

九日 午後九時徴兵検査の為、矢口君帰省す。

十日 月次会を兼ね新入生の歓迎会を開く。委員多勢君の得意な料理に頬鼓を打った後開会す。

初め新入生の挨拶の後、時田君、奥田君、平野君、矢田君、土井君等の演説あり。後、先輩小林、今井、笹部、亀井諸君の様々の御話、及先生の訓話ありたり。当日の委員は多勢君笹田君、平戸君、平岡君、土井君なりき。

又、閉会后、競賣を行ふ。

十一日 帰舎途中盛岡市に滞在中なりし飯島君は腸チブスの為、盛岡病院に入院中なる由命兄より。副舎長に通知ありたり。

十三日 午前四時に起床し、舎生全部円山へ花見に行き盛んなるへボヌケを行った後帰舎す。

十六日 午後四時、盛岡病院に入院中なる飯島君逝去の電報到着す。只夢の如し。哀悼に不堪。君は茨城縣土浦の産にして、土浦中学卒業後大正十年本大学予科に入学し、同年十一月二十三日、我が寄宿舍に入り、本年四月予科を卒業、林学科に入る予定なりしに四月の休暇を利用し帰郷せられ、帰舎途中盛岡なる命兄の下に立寄り。衆議員選挙の状

態を觀望中不幸にも腸チブスに侵され、本日午後二時頃永逝せられしなり。嗚呼悲しき哉。

君資性闊達にして政治を好み農民救済農民党の設立は君の宿題たりしなり。さればあらゆる講演会政談演説等に君の見へざる事なかりき。又、君は極端なる攝影家にて寒水と云へども冷水摩擦を行ひ間食をさくる等大いに努めしも。呼嗚悲しき哉。

君独特の笑声は今尚ほ耳を打つ如し。

十八日 運動部遠足を催す。午前八時十分発列車にて野幌に向ひ出發。厚別に下車し此処より野幌に行き、林業試験場に着したるは二時頃なりき。山口千さんの厚遇に預り、豚汁（食事部の用意せる）を味はひたる後帰舎す。

廿日 徴兵検査の為帰郷中なりし矢口君帰舎す。検査は甲種合格なりと。天晴未来の帝國軍よ、自重すべし。笹田君帰舎す。

廿一日 大学文武会主催の遠足を行ふ。午前九時札幌出發真駒内に遊ぶ。豚汁の興應宝口〔探〕等ありて愉快なりき。

三十一日 月次会を兼ね飯島君の追悼会を開く。波木居、時田、平岡、奥田、矢田、川島諸氏の悲壯なる追悼演説ありたる。後、小林、笹部、亀井諸先輩の御話ありたり。当日の委員は赤羽君、平野君川島君江尻君なりき。尚当日は飯島君在舎当時の舎に居られたる人々の参会を願ひしも只小林、玉川の2君のみなりし事は遺憾なりき。

本日午前五時より、北大グラウンドに於て尚志社と野球試合をなし四A対一の大勝に帰せり。積年敗戦の憾を晴つべしと云ふなり。本日より向四日間宮中におかせられては攝政宮御結婚御披露大饗宴を張らる事となれり。

六月一日 午前九時より舎生総動員して池の掃除を行ふ。農場より消火用ポンプを借り来り。池水を全部けへほさんとせしも。無盡荘の水■底かへ出し難く半分程出したる後、池底の泥土をさらひ出せり。終日の労働にヘト※※になりなる後主催者運動部より遺勞の為茶菓の饗ありき。当日の役員次の如し。

臨時 池掃除委員長 運動部長 多勢俊一君

同 技師 陸軍工兵伍長 白根治一君

同 技師 江尻惟一君

夜、桑園停車場開設の為、提灯行列ありき。

五日 午前五時より、実業団チーム■軍と野球試合をなし十四対四にて我軍大勝せり。■軍我敵に非ず。彼弱きに非ず、我強きなり。

九日 樽前山登山の為、旅行中なりし波木居、多勢、矢口、笹部、野崎の五君帰舎す。元氣頗る旺盛なり。最初に頂上に達したるは矢口入道君なりきと。最もヘタバリは多勢君とか。

十三日 憲政会総裁加藤高明が総理大臣となる。

十四日 午前七時野崎君徴兵検査の為帰郷す。

同目的にて平戸君午後九時二十分帰郷す。舎生全部踏切に行き見送たり。

十五日 札幌神社の大祭の為、市民イルミネーションで飾られ神輿は町をねり行くなど仲々賑かなり。兼て寄宿舎の一角に出現したる朝起会は多くの共鳴者を生じたり。今その役員及会員を列举せん。

会長土井、副舎長陸軍工兵伍長白根君 理事平野君、会員平戸君、松隈君、伊勢田君、松本君、西潟君、樋浦君、平岡君、以上十名

十八日 予科第一学期の試験発表さる。各員の奮闘を要す。

二十日 夜半、兼て徴兵検査の為帰省中なりし平戸君帰舎す。甲種合格なりと。愈々宿舎は軍人の卵養成所の観あり。

二十二日 農学実科合宿設立に付き、松隈君退舎す。近頃、新聞は排日、排米問題で中々賑つてゐる。口に筆に正義人道を称ふる。

米国が我移民防止の法案を制定せるは言語同断と云ふべし。彼等ヤンキー共の良心を凝ふ。

廿六日 朝四時に文藝部委員兼朝起会長土井久作氏単独にて利尻、禮文島昆虫観察に出発す。出達に際し曰く「天の使命に依りてちょっと行って参ります」と。

廿八日 夜決算を行ふ、計廿一円餘、一日平均五十三銭(食費)、予科、土専、試験切迫す。お互にスピードを掛け始めた。時々、静かに！！との注意あり。無試験マンの自重を望む。

廿九日 利尻鴛泊村の土井君より音信あり、気候は札幌より一ヶ月遅れてゐると。

七月二日 土専の試験始マル、大にガンバラれんことを望む。先月六月廿日、白根君予備兵役の為旭川に赴く。

三日 松方公二日午後七時廿分逝去なさる。齡九十才。二日午後松方公病氣危篤の旨天聴に達するや左の如く特旨叙位の御沙汰がった。

正二位大勲位公爵 松方正義
叙位一位 (特旨ヲ以テ位一級被進)

四日 米国大使館に揚げおきし米国旗掠奪。犯人は大阪にて遂に縛に就く時は二日午後二時。

「警 同行を求むるや汝も国の為自分のしたい為も国の為、只、自分は方法を誤りしのみ」と言ひてわるびれもせず、同行を承諾せりと。

九日 予科の試験終る。一学期最後の月次会を開く。舎生の抽籤五分間演説をなす。「花より団子」、「恋愛至上主義」、「ロブのけんくわ」、「苦と楽」、「類人猿」、「平野君の疵」等稀抜意想外のあり、或る者はその辞に窮し、抱腹せしむるものがあつた。斯くして愉快に十二時少し前にへボ抜と札幌農学校を歌ひ、解散す。部員改選を行ふ。選挙の結果左の如し。

文藝部 時田君 会計部 白根君
食事部 平野君 衛生部 赤羽君
運動部 川島君

十一日 多勢君夜急行にて帰省す。次第に舎生も減じ寂莫を感じ始む。非常に高温にて九十五度に達す。波木居、時田、笹田、平戸君達は銭函の海水浴場に涼を追ふ。

十二日 赤羽杉本両君夜の急行で帰省する。

十四日 樋浦君は幕別へ働きに出かけ、川島、波木居両君は根室方面へ旅行に出かけらる。

十五日 平戸君夜帰省され、野崎君朝帰舎される。

十六日 満月皓々たり、夜、舎生、六人、月見をする。

晝、福富君、水泳合宿より帰舎する。体中を真黒にして、月夜に裸とならば、存在を認められじとの評専なり。

十七日 夜、福富君帰省さる。

十八日 朝、矢口君、樺太旅行に出発。

廿日 朝、奥田君旅行より帰舎せられ、マリモを齎らさる。

廿八日 朝、時田君水泳合宿へ出発。

夜、決算を行ふ。一日分食費金七拾五銭也。

卅日 松島君より蓄音機を借りて野崎君のレコードをかけたり。西潟君合宿より帰舎、午後六時四拾四分にて札幌を去りる。時田君五時の汽車にて合宿より帰らる。土井君午後九時の列車にて豊富なる採集物を携げて元気にて帰舎せらる。

八月一日 午前六時、野崎君支笏湖方面の旅行に出発せらる。

八日 午前九時笹田君帰省さる。午後九時時田君帰省の為、札幌を去らる。

四五日前より宮部舎長病氣にて鼻血を数回出されたる由、舎生一同恢復の一日も早からん事を祈る。

九日 舎生有志数名、銭函へ天幕を張るべく朝出発せり。多勢、野崎、樋浦、吉井（東大理科）、白根、矢田君帰省。

十三日 月次会を意味して晚餐会を催す。舎生僅少なれど愉快此の上なし。

十四日 朝食前、多勢君単独にて帯広、根室、阿寒、網走の方面へ旅立す。廿四日頃、帰舎の豫定なりと。旭川より飛行器二台で飛び来る。興農園附近に於ける■合練習の為なり。珍しさ■附近の子供の飛行器の飛ぶ方向に走る者などあり。東大の吉井君帰京。

十五日 朝食後、樋浦君銭函の白亜会賣店へ手傳の為出発する。

宮部先生全快の由亀井氏より聞く。

廿日 故石澤氏の夫人御来舎あり、新築を參觀せられたり。御来札の序に態々、山鼻より御訪ね下れたると二・三日以内に静岡に向はる由。

廿二日 朝、時田君帰舎、晝、江尻君岩内より帰舎さる。夜、水瓜の饗応あり。

廿五日 午前、江尻、白根両君は小樽へ見学に行かる。

夜晩く帰舎。野崎君は小樽の友人の家に遊ぶ。時田は祝津へ出かける。

九月六日 奥田義正君、夜退舎、移轉さる。同君、寄附の書籍左の如し。

アインスタイン（モスコウスキー著）、エマーソン論文集（上下）、運命（独歩）、小説の作り方（秋声）

Faust part1. (Arnna Swanwich)

八日 夜、野崎健之助君退舎せらる。音楽をたしなむためにお互の迷惑を心配して。同じ時、十二号室で舎生大会をし、波木居副舎長の提案たる「食費の額を一立として、月中に拂込まれたい」との問題を討議する。理由は、会計の猥雑なる計算を省き、不時収金に備へ、現金買物を多くし、食費の残余は、舎費を以て補助したりし、事物に当て、以て、寄宿舎の積立金の出来るやうにしたいとなり。全部賛成の如し。

九日 朝、多勢君旅行よりかへる。捕鯨の熱未ださめず、元気当るべからざるものあり。夜晩く、濱本君帰舎。

十二日 夜、舎生大会あり。此前の相談を続け決を採りたる結果、食費丈を先拂にすることになる。会計は従前通り。

十三日 舎生六、七名を残して、元気の連中、石狩に遠足す。十四日、夜晩く疲れたる態にて帰舎。但、疲れたる態ならざる人々もあり。

二十三日 昨日の雨でコートに水は溜つてみたけれ共、運動部の努力に依て定刻にはラインを引かれて、一日はテニス大会に暮れたのである。陽もコートのしめりも有て来いの日和である。午前中は舎生紅白に分れて覇を争ふ。始てラケットを握る人あり。たま※※通学の途にある女学生をして佇立、失笑せしめる一幕もあつた。白根君当らずして遂に紅軍の勝利に帰す。

午後は、舎外団を迎へて仕合する。定刻を少く遅れて、左の如きメンバーで行ふ。

寄宿軍	浜本	平岡	赤羽	多勢	川島	多勢
	矢田	白根	笹部	時田	矢口	時田

舎外軍	山田千	山田ヤ	松島	今井	奥田	山田壬	奥田
	奥田	坂本	小林	小林	野崎	奥田	野崎

廿五日 時田生は動物実験のため、朝八時四十分札幌発で小樽築港に向ふ。廿七日まで滞在の予定なり。

廿七日 晝、時田生帰舎。

夕食の御馳走あり、月次会を七時半より開く。

鈴木限三先生、亀井専次氏を迎へ、新入生、平川好文、伊東豊治、近藤春造の三君の歓迎会を兼ね。

波木居君、挨拶されて、寄宿舎の功労者を記念し、記憶することを、寄宿舎将来のために唱道さる。

新入生三君の挨拶あり。多勢君、樋浦君、交々立って、熱辨を振ふ。矢口君は、樺太旅行の話をされ、江尻君は岩内労働のことを語る。

土井君は、朝起の奨励をされ、幾多の引例を以て立証される。伊勢田君は小田原に於ける地震の思出を語る。笹部、平野、二君も立たれる。

亀井氏、鈴木氏各々訓ずる所あり。楽しく会を散ずるを得たり。

十月十七日 テイネ登山を計画したれど前日より雨。あまつさへ、当日は、雪、あられ、

みぞれを朝より降らせて、気温の低下甚しきものあり。

二十一日 函館の先輩、小野栄次氏舎を訪問せらる。

夜、去る十八、十九日の演習に参加せる舎生慰労を兼ねて、氏と会食する。氏の御菓子の饗応あり。

平岡寿君退舎さる。左の図書御寄附ありたり。

トルストイ	藝術とは何ぞや
木村毅訳	アミエルの日記（前）
江馬 修	心の窓
英文学会	シェリ研究
スロソン博士	アインスタインの相対性原理解説
	禪画百譚
村上静人訳	イブセン傑作集

三十日 二十七年記念祭顛末。

去ル十三日準備並執行委員ノ発表アリタリ。左ノ如シ。

饗宴部	委員長	矢田茂夫		
委員	多勢俊一	平野三夫	平戸勝七	
	笹部三郎	杉本良次	福富邦夫	
	西潟高一	近藤春蔵	平川好文	
装飾部	委員長	時田郁		
委員	平岡寿	赤羽敬一	樋浦大三	
	濱本喜一	清水三郎		
余興部	委員長	土井久作		
委員	川島三二	江尻唯一	矢口道愛	
	伊勢田実			

庶務会計部委員長 波木居修一

委員 笹田磐 白根治一 伊東豊治

饗宴部ハ額ヲ集メテ審議ヲコラシ、余興部ハ遅シキ暗中飛躍ヲ試ミ、庶務部ノ諸君ハ雪ノ中ヲ先輩招待ノタメニ訪問ノ勞ヲトラレ装飾部モ遅レバセ乍ラ廿九日ハ夜半マデ会場ノ装飾ニ意ヲ用フ。

明ケテ廿日ハ雪ノ朝トテ道路悪キニ関ラズ、定刻ニハ来賓、繰込ミ来ラル。

宮部舎長、前川氏、北村氏、亀井氏、犬飼氏、足立氏、笹部氏、小林氏、奥田氏、今井氏ヲ迎ヘテ、大家族ノテーブルハ所狭シト並ビタル珍味ヲ載セテ擴リタリ、■シ、此上余融ナキ膨張ト見ヘタリ。

七時半頃、記念式ヲ始ム。白根君開会ノ辞。波木居君ノ挨拶トノ間ニ、一同祝電ヲ合唱ス。和氣堂ニ充チ、感慨迫リテ、故人トナラレシ、功勞者ヲ偲ビ、将来ノ豊富ヲ心ニ約スル所アリタリ。

舎生一人々祝辞ノ后、奥田君、今井君、小林君、笹部君立タレテ、各々寄宿舍固有ノアトモスフェーレヲ尚シトシ、大ニ此精神ヲ后マデ持續センコトヲ将来ニ固ク期スル所アリ。足立氏煤ケシ天井ニ古ヲ偲ビ、犬飼氏ハ入舎当初ノ印象ヲ語ラレ、現代学生寄宿舍ノ続々トシテ建テラルルニ当リ、慨嘆ニ堪エザルハ、ソレヲ寄宿舍ニ何ラノ主義主張アルナク、此舎ノ如クーツノ主義ニ立ツモノノ存在ヲ喜バレ、氏ノ整理セラルル尚志舎ト提携シテ質実剛健ヲ全ウセンコトヲ希ハル。

亀井氏北村氏次デ立タレ、日本ノ現状カラ大ニ青年タルモノノ責任ヲ論ゼラル。前川氏ハゴ自信最古イ先輩ナルコトニ驚カレ、寄宿舍ノ前途ヲ祝サル。

宮部舎長御挨拶アリ、マス※※舎ノ主義ヲ完ウシテ行ク様ニ願ハレ、先生ノ御発声ニテ、寄宿舍万歳ヲ三唱ス。

会閉ヂテ、余興ニ移ル。ソノ、プログラム、次ノ如シ。

挨拶 伊勢田君

小夜曲 ヴィオリン 多勢君

マンドリン 笹田君

長唄（網ノ館） 平野君

手品 平川君

新高砂（尺八） 平戸君

川島君

蓄音機

独唱（リンデン・バウム） 時田君

一寸法師 赤羽君

ローレライ 白根君

杉本君

スキー・ホーム 笹田君

（オーケストラ団） 多勢君

（飛入） ミヌエツト 奥田君

（ヴィオリン）

江尻君の大奇術、火遁ノ術

◎先輩諸兄の隠藝（先輩大ニ勤ム、サスガ老獺ナリ、一流ニ、ヤッテノケル。）

勸進帳 笹部氏

詩吟（王陽明） 小林氏

尺八・千鳥 今井氏

長唄（四季ノ眺） 足立氏

詩吟 犬飼氏

詩吟 亀井氏

歌おきあがりこぼし 北村氏

土勢調査の哀吟

高砂 前川氏
号令 宮部先生

◎大福引にて一しきりたはむれ十一時半頃散会す。

先輩の隠藝ハ前例ナキ一新紀軸ナリト云ツベシ。遂ニ先生マデ引張り出シ中ツルニ、先生モ去ル者、一同ヲ立タセ、「キオツケ！廻レ右！」デ、後ヲ向カセタル間ニ、座ニ返ラレ、「クス※※、休メ！」

楽キ一夜モカクテ、和氣充ツル中ニ過ギニタリケリ。今ヤ十月モ終ラントス。

禪ヲシメナホス秋也。松本彰君、中村弘志君ヨリ祝電アリ。

廿一日 午前十時ヨリ、天長祝賀式アリ、万歳三唱シテ、カヘル。夜、中央講堂ニテ、文武会音楽部第一回演奏会アリ。

十一月一日 各室ノストーブ、据付成ル。早クモ、焚ク者アリ。冬ハ来レル也。

二日、清水君退舎セラル。

三日、楓林第十四号ノ廻覧ヲ始ム。夜、紀念会報告ヲ兼ネテ特別室ニ茶話会ヲ催ス。

八日 稀有ノ大雷雨襲来ス、万象タメニ声ヲヒソメ、天来ノ叱責ニ、懼恐スルニ似タリ。

梅津元昌氏寄贈ノ菓子ヲ図書室ニテ一同享樂。